# 環境問題を人間の意識の汚染として捉らえる

馬　田　哲　次

## Ⅰ．はじめに

現代社会が抱えている大きな経済問題の一つとして環境問題がある。環境問題を解くべく様々な提案がなされているが，環境問題が人間の根本的な問題であるということを意識して論じていることは稀である。環境問題は人間行動の結果として生じている。従って，人間行動を環境と調和する方向に変化させなければその解決は不可能である。そして，人間の行動は意識によって規定されている。それも潜在意識の中に形成されている観念によって規定されている。環境問題を解決しようとする場合，人間の行動を変えなければならないが，どの様な人間を前提にし，どの様に行動を変えようとしているかということをきちんと明確にして議論しなくてはいけない。

本稿の構成は次の通である。二節では，環境問題が人間の意識と人間の意識を規定している社会経済システムの問題であるということを明らかにする。三節では，人間の捉らえ方により環境問題の解決の方法が原理的に三通りあることを明らかにする。四節では，環境問題を解決するための根本的な方法と，その為の新しい経済システムについて考察する。そして，第五節で本稿のまとめが述べられる。

## II．環境問題が発生する要因

環境問題を解決するために，様々な提言がなされているが，問題が発生する根本的な原因を議論しないまま政策を行っても，問題の真の解決はありえない。社会経済問題は，日々の人間の行動の結果として生じる。環境問題も例外ではない。そして，人間が行動する場合には，ただ本能のままに行動する訳ではない。何等かの意識をもちながら行動している。従って環境問題を真に解決するためには，日々の生活の在り方を決めている人間の意識にまで踏込んで考察しなければならない。人間の意識がどの様になっているのか，また，人間の行動を規定している観念が，どの様な要因によりどの様にして形成されるのかといったことを正しく把握しなければならない。人間の意識の仕組を正しく知り，我々の生活の在り方を決めているのは何か，自分自身を深く見つめることにより知り，一人一人の生活を自然と調和する方向に変えていくことを意識的に行わなければならない。その際，周りの人々と十分なコミュニケーショシをとることが，自分自身の生活を深く知るうえで，重要な役割を果たすと思われる。

人間の意識は，図1のようになっている。環境問題が発生する根本的な原因は，意識が汚染されるからである。意識の汚染とは潜在意識の中に不平，不満，憎しみといった悪感情や不必要な観念が溜まることである。その結果，人間が目先の自分のことしか考えられなくなり，本来の自分の欲求や自分が持っている能力が分らなくなり，集合無意識を意識できなくなり，自然との繋がりを感じることが出来なくなり，環境が汚染される。このことを意識の浅化と呼ぶ。集合無意識とは，人類に共通の意識であり，自然とも繋がっている。従って，人間の意識がこの意識レヴェルにあれば，人間が自然の中で，自然によって活かされていることを理屈ではなく，身体全体で実感として理解することが出来る。それさえ感じ取れれば，人間は自然を汚すことは出来ないし，本能的に守ることだけを考える。

ところが，人間の欲等が原因で意識が汚染されると，この集合無意識が意識出来なくなり，意識レヴェルが浅くなり，セルフィメージが縮小してしまう。自分のことしか，それも近視眼的にしか考えることが出来なくなってしまうのである。環境はおろか，自分の最も身近な家族さえ心の底から愛し受入れることが出来なくなってくる。そして，自分すらも愛せなくなってしまう。豊かさや自由がねじ曲げられて現象するのである。

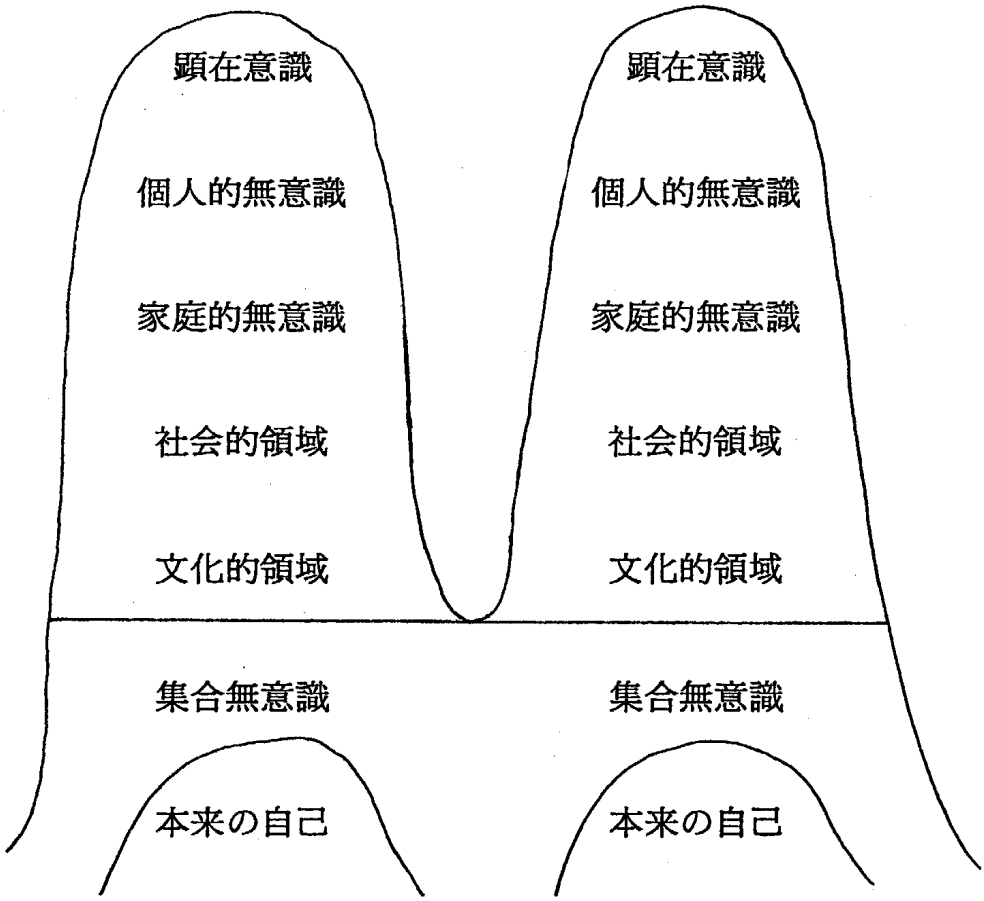


図1

次に，意識のレヴェルが浅くなり，セルフイメージが小さくなる社会経済的な原因を考察する。説明の便宜上労働者と企業家に分けて説明する。まず労働者についてであるが，労働者の意識が浅化する原因は，疎外された労働にある。人間本来の労働とはプロセスを進める労働である。[1]つまり，自分の心の奥から湧き上がるイメージを現実のものとし，労働を通し

て周りの人々との交流が深まっていくような労働である。労働が本来の労働になっていれば，意識の深化と進化が進み，本来の自己で生きることが出来る。ここで，意識の深化とは，無意識下のセルフイメージが意識され，それを受入れ統合し新たなセルフイメージを創ることである。また，意識の進化とは，本来の自己が持つ潜在的な能力が現実化することである。そのとき集合無意識を意識し，自然との繋がりも心の底から身体全体で感じることが出来る。

ところが，疎外された労働は，自分の意志による労働ではない。自分が心の底からやりたいと思っている労働ではなくて，人に命令された労働である。或いは，ベルトコンベアのスピードに合せることを強制された労働である。また，食べていくために無理やりやっている仕事である。そこには，肉体的欲求から自由に生産するという，人間らしい生産はない。そこでは人間がマシンとなる。人間の脳細胞から五感を感じる力が奪われてしまう。そうなると，人間の心を抜かれ，本来もっている暖かい血の流れを感じなくなりマシンと同化してしまう。人間がマシンとなれば，人間どうし向い合うことが出来ず，機械としか向い合うことが出来なくなる。人間の賢さが機械を産みだしたのであるが，今度は逆に人間がマシンと化している。

自己本来の欲求から外れたところで労働をしていると，ストレスがたまってくる。イライラしたり，無力感を感じたりする。心の中にそのようないらいらやストレスが溜まると，人間は溜めたままではいられないから，溜めていることを感じなくするか，溜めたものを吐きだそうとする。感じないようにしていると，ゴミの中にいても，環境が汚染されていても平気でいることが出来る。汚いものを汚いものだと感じることが出来なくなる。だから，環境を汚染することが平気で出来る。

1）詳しくは，拙稿『新しい労働の在り方を目指して—プロセスを進める労働』［5］参照。

ここで自然と疎外された労働との関係について，マルクスがどう考えていたかみてみよう。自然について，マルクスは，例えば，次のように述べている。[2)]

「自然，すなわち，それ自体が人間の肉体でない限りでの自然は，人間の非有機的身体である。人間が自然によって生きるということは，すなわち，自然は，人間が死なないためには，それと不断の［交流］過程のなかにとどまらねばならないところの，人間の身体であるというとなのである。人間の肉体的および精神的生活が自然と連関しているということは，自然が自然自身と連関していること以外のなにごとをもいみしはしない。というのは，人間は自然の一部だからである。」
(強調点は原著者)

しかしながら，疎外された労働は，人間から自然を疎外するのである。このことをマルクスは，次のように述べている。[3)]

「こうして疎外された労働は，
(3) 人間の類的存在を，すなわち自然をも人間の精神的な類的能力をも，彼にとって疎遠な本質とし，彼の個人的生存の手段としてしまう。疎外された労働は，人間から彼自身の身体を，同様に彼の外にある自然を，また彼の精神的本質を，要するに彼の人間的本質を疎外する。」
(強調点は原著者)

次に企業家についてであるが，企業家の方は，とにかく利潤をあげないことには始らない。公害防止装置を付けた方がいいということは分ってい

2）マルクス，「経済学・哲学草稿」［2］，94-95ページ。
3）マルクス，「経済学・哲学草稿」［2］，98ページ。

ても，また，再生紙を利用した方がいいということは分っていても，利潤が減少することが分るとその導入は難しい。環境に調和するような生産やリサイクルのシステムを考えだし，導入することが出来たとしても，それを赤字を出してまで続けることは出来ない。

市場が成熟し，これ以上の生産を増やすことが，地球環境を守るという観点から，必要ないと分っていても，生産を止めるわけにはいかないのである。だから，必ずしも必要でないような商品を考えだし，それを無理してでも消費者に買わせなければならない。莫大な広告費を投じて消費者の消費を煽り立てることになる。本当に必要なものは，特に宣伝しなくても売れるのである。

労働者の方は，労働が疎外されて，ストレスがたまり，自分が本来必要なものが何か分らないようになっている。作られたイメージや流行に従って，必ずしも自分が必要としないものまで一時の心の迷いのままに購入させられてしまう。必要でないから購入したとしても十分活用されることがない。活用されることがなければそれはゴミとなって捨てられてしまう。しかしながら，生産を止めてしまうわけにはいかないのである。需要が飽和したならば，新たな需要を無理してでも作っていかなければ，資本主義社会は存続出来ないのである。

それでは何故資本主義社会では，このように無駄なものまで生産し経済成長をしなければ持続できないのであろうか。

資本主義社会の第一の特徴は，商品経済であるということである。商品は自家消費を目的として生産されるのではない。販売してより多くの剰余価値を得るため，資本が増殖するために生産される。そして，商品を手に入れるためには貨幣と交換でないと手に入れることは出来ない。生活に必要な最小限の物さえも貨幣と交換でないと手に入らない。そして，商品の価値は社会的に平均的に必要な投下労働量に規定されて決定される。

そして資本主義社会の第二の特徴として，労働力が商品であることがあげられる。貨幣を手に入れるために，何も売れるものをもたない労働者は，

自分の労働力を売らなければ貨幣を手に入れることが出来ない。そして，生活必需品をはじめ，多くの物が貨幣がないと手に入らないし，逆に貨幣があれば手に入れることが出来る。このことから，労働者は貨幣を持っていないと不安になり，逆に貨幣を持っていると安心する。

また,労働力をいつも簡単に売ることが出来れば何も問題は生じないが,いつも売れるという保証はない。不況がひどくなり長引けば，どんなに安い賃金でもいいから働きたいと思っても,働くことが出来ない場合がある。従って，とにかく貨幣が手に入る時に，稼げるだけ稼いでおこうという行動が生じる。死ぬまで必要な貨幣が手に入るという安心感が無いためにやみくもに貨幣を追い求めてしまう。十分すぎるほどの貨幣が無いと安心することが出来ないのである。お金が全てであり，頼れる信じられるものはお金であると思ってしまう。

また，企業の方は，資本を自己増殖させていくことが資本の目的である。商品はいつも売れる訳ではない。売れる時に売っておかなければならない。また，より多くの剰余価値を得るためには，他の企業との競争に勝つためには，新しい技術を体化した資本設備が必要になる。そのためにはより多くの貨幣が必要になる。

この様に，労働者にしても企業家にしても，貨幣を手に入れることが死活問題に関わるために，生きていくうえにおいての第一の目標になる。さらに，貨幣を多く所有していることが，社会的な評価に繋がるため，このことを益々強化する。

このように，資本主義社会では，商品経済と労働力の商品化の結果として，貨幣がシンボルとして作用するようになる。貨幣で全てのものが買えるという幻想をもち，やみくもに貨幣を追い求めてしまう。或いは貨幣価値に換算できないものは価値が無いとみなしてしまう。本来は何の使用価値もない貨幣が，手段としてではなくそれ自体が目的として追い求められてしまう。貨幣が自律的に運動し，人間の意識を支配してしまうのである。

このようにして，貨幣を求めることが第一の目的になってしまうと，何

よりも貨幣が優先される。貨幣価値が無いものはどんどん切り捨てられてしまう。金になるかならないかが，行動することの基準になる。このことが意識されているうちはまだいいが，習慣になってしまうと麻痺して意識されなくなる。無意識のうちに，

「この世は金が全てである」という観念が植え付けられて，

金になる――――→価値がある――――→行動する
金にならない――→価値がない――――→行動しない

という思考，行動のパターンが無意識の中にパターン化されてしまうと，無意識の中の自己本来の欲求が全く分らなくなってしまう。セルフイメージが小さくなり，目先の自分のことだけしか，それも貨幣という眼鏡を通してしか考えることが出来なくなる。人を信頼することも出来なくなり，信用できるのは金だけだというようになる。人と関係を結ぶのも，金になるからである。自分が幸福であり，周りの人も幸福であるといった，共に豊かさを求め，共に分かち合うという意識が乏しくなる。金にならなくなった時に，その人との関係は無くなってしまう。まさに，金の切れ目が縁の切れ目なのである。

しかし，人間の心の奥には，人を信じ，人と共に生きるという意識と感覚がある。それは，深くなれば，人種や国境や言葉を越えて，さらには，人類を越えて自然と共に生きているという意識と感覚ももっている。

環境問題の根本的な原因は，人間がこの様な意識と感覚，つまり集合無意識を意識出来なくなり，地球との接点を無くしたことが根本的な原因である。

この節の議論をまとめてみる。人間の意識構造が，図2のように，いつでも，集合無意識の奥にある本来の自己を意識している状態であるか，図3のように，簡単にそれを意識できるようであれば，問題は生じない。

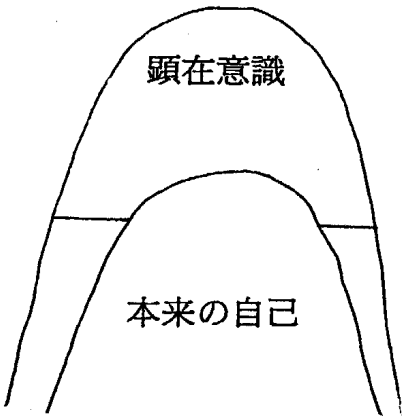


図2

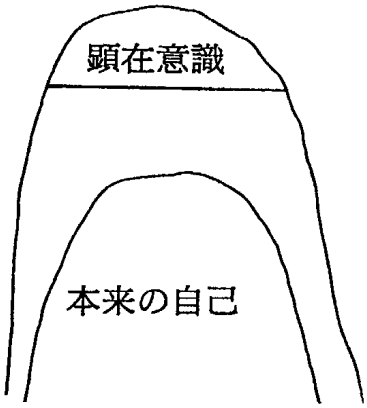


図3

意識の汚染が少ない

ところが，多くの人々は，資本主義経済の特徴である，商品経済と労働力の商品化による，貨幣のシンボル作用（物象化）と，疎外された労働が原因で，無意識層に悪感情と無意味な観念が溜まり，意識が汚染され，本来の自己はおろか集合無意識さえも意識出来ずにいる。図4。このため，自然との繋がりを実感することが出来なくなり，環境問題が発生するのである。

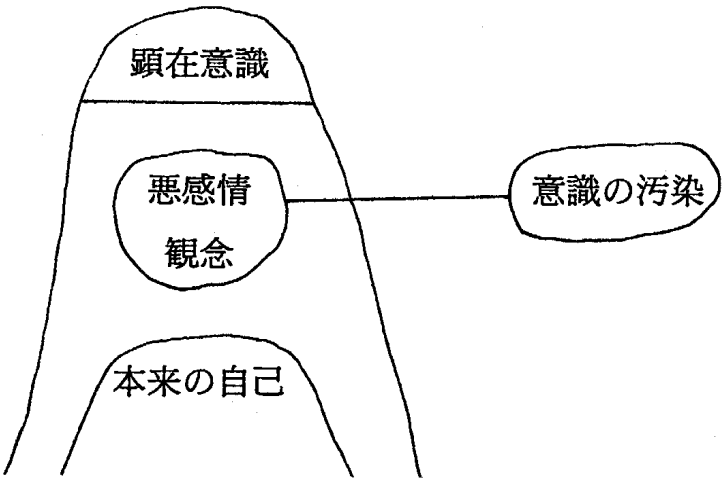


図4

従って，環境問題を根本的に解決するためには，集合無意識を意識し，その意識レヴェルで生活しなければならない。

## III. 環境問題を解決するための原理的な三つの方法

前節で述べたように，資本主義社会で生きている人間は，貨幣シシボルを盲目的に無意識のうちに追い求めている。その結果，意識が汚染され，本来の自己はおろか集合無意識さえも意識できずにいる。集合無意識を意識できないでいるから，自然との繋がりを実感出来なくなり，環境問題が発生する。しかし，人間には貨幣シシボルを追いかけていることを意識し，それをやめ，集合無意識を意識化出来る可能性もある。

環境問題を解決するということは，まず第一に人間の行動を変えることである。排出していた二酸化炭素の量を減らすとか，ゴミの量を減らすかしなければならないが，そのためには人間の行動を変えなければならない。その際，人間をあくまで貨幣シシボルを追い求める人間とし，“人間は変る可能性はない”と考える場合と，“人間は変る可能性がある”と考える場合とでは，環境問題を解決する手段も変ってくる。原理的には，以下の3つの方法が考えられる。

第一の方法：人間を貨幣シシボルを追い求める存在だと捉らえ，それを変えることは出来ないと考える場合。

この場合には，環境問題に関係する経済行為を全て貨幣で評価していくことになる。図示すると，図 5。

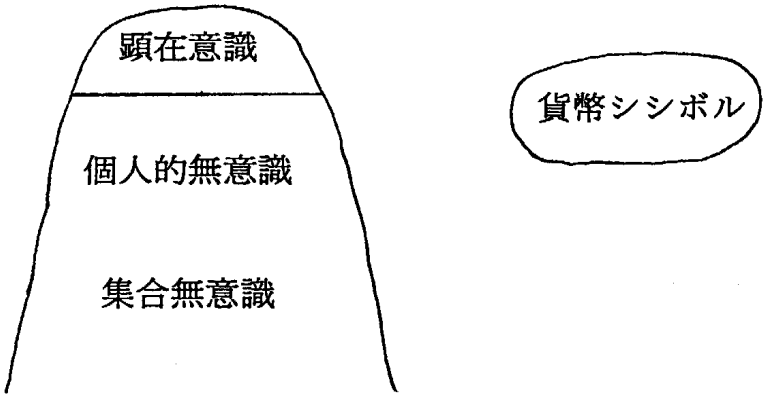


図5

具体的には，税金や補助金の制度の導入である。環境を汚染するような生産に税金を課す。公害の防止装置に補助金を出す。産業廃棄物や家庭のゴミもお金を出してひきとってもらう。酒や清涼飲料水を売る時もかなり高めのビシ保証金を含んだ価格設定をし，ビンを返しにきたときに保証金を返す。ガソリンにも，排気ガスの量を最適にするように税金を課す。二酸化炭素の排出権を売買するというのもこの方法である。

この方法は，市場で常に満足のいく価格がつくこと，そうでなければ適切な税金を課し，補助金を支給することがうまくいくための必要条件である。古紙を回収して再利用するよりも，新しいパルプを購入する方がコストが安いならば，古紙の回収は進まない。この場合には，古紙を原料として利用する場合に補助金を支給すればいいのだが，市場価格が変化する度に弾力的に補助金を変化させるのは困難である。

また，税をかけることによって生産量が減少すれば，経済成長率が落ちたり，失業が増大することもある。もっとも，公害防止産業や環境保全産業などがおこり，マクロ的に見れば，必ずしも生産量が減少して雇用量が減るとは限らない。しかしながら，資本主義経済は，経済成長をしないと持続出来ない経済システムであるため，環境税の導入などで経済成長が疎外されるようであれば，このような方法はうまくいかない。

第二の方法：貨幣シシボルに代えて，環境シシボルを優先するように行

動をかえる。

この方法は，貨幣と環境のどちらを選ぶかと問われた時に，環境を選ぶように環境価値観を意識の中に植え込むことである。図示すると，図6。

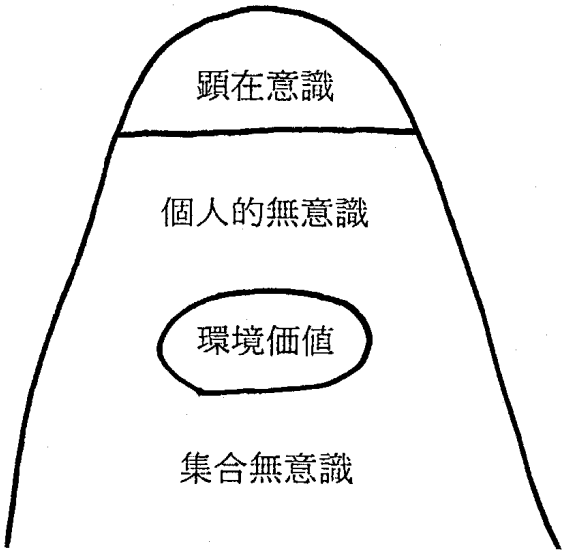


図6

このためには教育や，宣伝活動が重要になる。企業も環境をビジネスの前面に押出してくるようになる。環境を守るための製品と，そうでない製品，環境を守るような企業とそうでない企業を消費者が見分けて，環境を守るような選択を消費者がすることが重要になる。バージンパルプを使って紙をつくる方が，古新聞を使うより安くつく。この場合は，多少高くても再生紙の方を消費者が購入することが重要になる。

環境価値観を植え込むという場合に問題になるのは，意識のどのレヴェルに環境価値観を植え込むかということである。集合無意識を意識出来るようであれば，自然との繋がりを実感できるので，環境価値観を取り込むのは容易である。しかしながら，そうでない場合には，環境価値観を取り込むのは容易ではない。頭では環境が大切なことはなんとなく理解できたとしても，環境の大切さを実感することがない。それに較べて貨幣のシシボル作用は強力である。環境よりも貨幣を選ぶという潜在的な欲求は強く

働いている。

従って，この方法による場合には，法制度が重要な役割を果たす。反環境的な生産，消費活動をしたとしても，それが罰せられることがないならば，反環境的な生産や消費はなされる。何故ならば，貨幣シンボルの働きは強力だからである。それは，貨幣に生活や企業の存続がかかっているからである。安い商品を買った方が或いはコストの安い生産方法をとった方が企業にとって有利であれば，安い方を選択しようとする衝動は企業や消費者に常に働いている。

開発をしようという企業と，自然を守ろうとする人々との間に対立がおこる。これはまさに貨幣価値観と環境価値観との対立である。当事者間の話し合いで解決がつかなければ，司法によって解決されることになる。

しかしながら，どんなに法を定めて罰則を規定したとしても，それが生存の欲求を満たさなくなれば，その法律は守られない。法の網の目をくぐり抜けようとする。例えば，原発をつくらなければ食べていけない，つくると遥かにいい暮しが出来るというようであれば，貨幣価値観が環境価値観より選択される。

環境価値観が選択されるためには，幾つかの条件がある。第一は，人々の物的な欲求が飽和し，物的な豊かさを求めなくなっていること。第二に，最低限の生活が出来ること。第三に，環境価値観と貨幣価値観が対立した場合は，地域住民と企業との対立という構図になりやすい。地域住民が勝つためには，個々人の力は弱いので，それを結集させる必要がある。そのためには，環境価値観が個人の欲求，価値観と対立しないこと，地域住民の間に共同体感覚が広がっていることが重要な条件になる。

第三の方法：人間の意識の深化と意識の進化を進め，集合無意識を意識して生きるようにする。

意識の深化とは，無意識を意識化し，統合し，セルフイメージを拡大す

ることである。意識の進化とは，本来の自己のもつ潜在能力を現実化させて生きることである。図示すると図7。

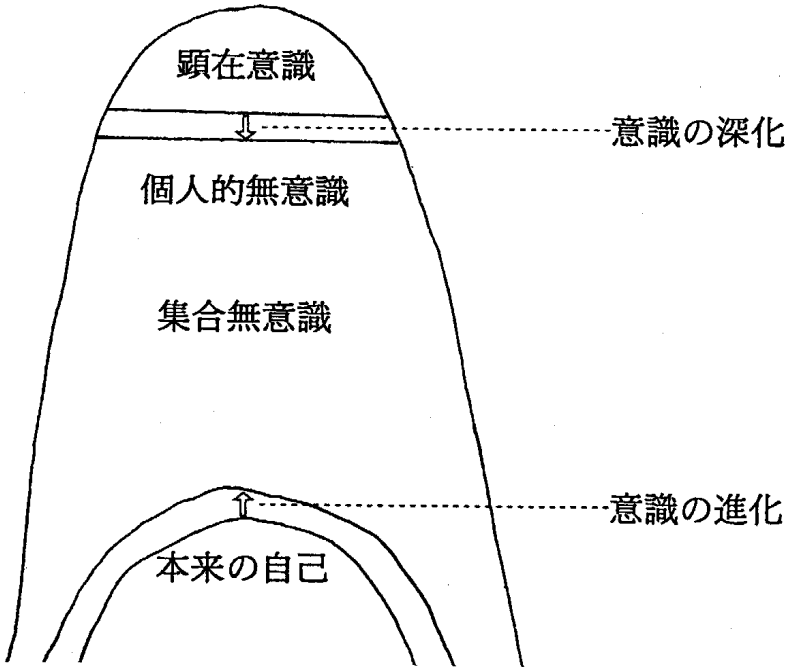


図7

このプロセスを続けることによって，人々は集合無意識から本来の自己を意識することが出来るようになる。そのときに，人々は自然によって生かされていることを身体で感じることが出来る。マシン化した人間が生気を取り戻すことが出来るのは，本来の自己を意識し，自然との繋がりを取り戻すことが重要な条件になる。このような人々が社会の主流になったとき，環境問題が根本的に解決する方向に向かう。環境問題が生じるのは，意識が汚染されているからであり，意識の汚染が無くならないと，環境問題は根本的には解決しない。そして，意識を綺麗にするための根本的な方法が意識の深化と進化である。

## IV．環境問題を解決するために

以上，環境問題を解決するための原理的な三つの方法について述べてき

たわけであるが，現実に取られている方法は，第一か，第二の方法てある。しかしながら，第三の根本的な方法を意識し，その方法を進めていかないと，環境問題の真の解決はない。

環境問題の根本的な原因は，ものごとの価値を貨幣価値でしか見られなくなり，意識が汚染された結果，人々の意識レヴェル浅くなり，集合無意識や本来の自己を意識することが出来なくなったことにある。従って，資本主義社会の下でも，意識の進化と深化を行い，集合無意識を意識化出来れば問題の大部分は解決する。

人間の意識と資本主義社会は密接な関係にあり，意識の大部分が経済システムに規定されている。しかしながら，資本主義社会の中にあっても意識の進化と深化を進めることは可能である。以下，そのことについて考察しよう。

我々の生活で最も身近に感じられる環境問題であるゴミ問題を取上げて考えてみよう。ゴミ問題というときには，どうゴミをリサイクルし，再生し，再資源化していくかという議論がよく見受けられる。このことは重要であり，その重要性を否定するつもりはない。この方法は，3節の議論に即していえば，第一または第二の方法による解決の仕方である。

ここでば，ゴミ問題を，環境問題解決のための第三の方法，つまり意識の深化と進化を進めるための手段として考えてみたい。それは，ゴミを出さない生活である。リサイクルは重要であるが，それ以上に意識しなければならないことは，ゴミを出さないことである。

ゴミをリサイクルする場合，例えばアルミ缶とスチール缶をベルトコンベアにのせて，磁石で仕分けをするということが行われている。これではいけない。アルミ缶とスチール缶を分けて出すということをしなければならない。環境問題を解決するためには，一人一人が環境問題を自分の問題として意識しなければならない。問題を根本的に解決する前に安易にマシンに頼ることは，人間から考える力を奪い，意識の進化と深化のプロセスを止めてしまう。安易に機械に頼ることが，環境問題に対する一人一人の

意識を遠退かせている原因とも考えられる。

環境問題を意識するためにも，出来るだけゴミが出ないような生活を意識的にし，やむを得ず出たゴミは，リサイクルし再資源化する。そうすれば，リサイクルだけ考えるよりも早くゴミ問題は解決していく。完全にゴミを無くすことは難しいから，ゴミの量を最小限に抑える生活をする。そのような生活を意識して行うとき，意識の深化と進化が進み，自然との繋がりを回復し，環境問題が根本的に解決される。

ゴミの量を最小限に抑えるためには，不必要な物を買わないことてある。購入した物が十分活用されないときゴミになる。余計なモノを買わなければいい。そこでまず，何故人は余計なモノを購入し消費するかと考えてみる。それは自己本来の欲求が分らないからである。自己本来の欲求が分らないときに，作られたイメージ広告にふれると，何かが得られるような気になる。その商品を消費することで，何か満たされないものがみたされるような錯覚に陥る。或いは作られた流行に取り残されると，人との繋がりが失われていくような気になる。この様に，自己本来の欲求が満たされていないときには，何か漠然とした未充足感を感じる。それを物によって満たそうとするが，物だけでは満たされることはなく，余分なモノとなってゴミになるのである。

現代日本の生活をみると，物は有り余っている。現代の病気は栄養不足というよりも，栄養過多で起こっている。様々な原因でストレスが生じ，食べずにはいられない場合も多いだろう。食べ物に限らず，不必要な物を便利そうだからとか，衝動買いとかで買い込んでしまっている。或いは買わされている。それが十分に活用されずにゴミとして捨てられているのである。図6のように「心の豊かさ」と「物の豊かさ」とを比べた場合，前者を重視するひとが増えている。物だけでは本当に豊かになれないことに多くの人々が気づき始めているといえる。[4)]

4）経済企画庁国民生活局編，「国民生活を変える新たな主役たち」[1]，69ページ。

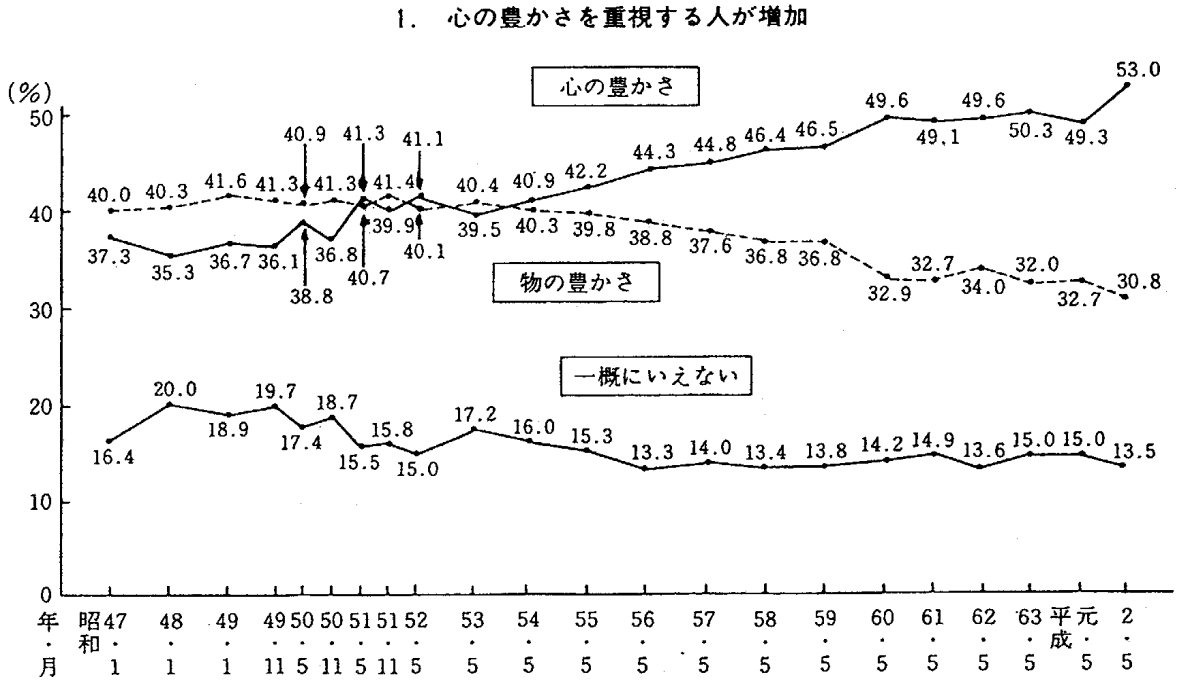


図 8

従って，自分が本当に欲しいものは何なのか，物によっては満たされない心をどうやって満たしていくかということを意識して，それを実現していくように生活を変えていく必要がある。そのような生活をすると，余分なモノは買わなくなり，ゴミ問題も自然と解決される。

では満たされない心をどうやって満たすかということが問題になるが，それにはマズローの欲求の五段階説がヒントになる。それは人間の欲求を次の五つの段階に分けたものである。

①生存の欲求

②安全の欲求

③愛と所属の欲求

④承認の欲求

⑤自己実現の欲求

現代の日本においては，大多数の人々の生存の欲求と安全の欲求は満たされている。欲求が満たされないという場合，愛と所属の欲求，承認の欲

求，自己実現の欲求が満たされていないのである。この満たされない欲求を満たすためについつい余計なモノまで買ってしまう。愛情を得るために不必要なプレゼントを買ってしまう。友達に認められるために，流行しているという理由だけで一年後には着ないままになってしまう洋服を買ってしまう。自分の思うような仕事が出来なくてストレスが溜まり，酒や煙草の消費量が増える。びどくなると病気になり，薬の消費量が増える。どれも自分の欲求が満たされないことによって不必要なモノを購入し，それがゴミとなって出てくるケースである。ストレスから来る酒や煙草の消費は単なるゴミ問題にとどまらず，人間の身体自体にも害を及ぼすことになりかねない。人間の身体自体がごみ箱と化す。

このような場合は，いたずらに物の消費を増やしても，本当の欲求は満たされない。それどころか，余計なものを購入してしまったらかえって本当に必要なものが何か分からなくなってしまう。まず，自分が本当にほしいものが何かを知る必要がある。

自分にとって本当に必要なものが何か分かるために最初にしなくてはならないことは，不必要な物を捨てることである。このとき一時的にゴミは増えるがそれは仕方がない。永久にゴミを出すのではなく，ゴミが出ないような生活に変えていくためにまず必要なことである。

家の中を見てみる。家の中を最も狭くしているのは家具である。箪笥，ドレッサー，引き出し，机，椅子等を見ると，これがなければ家の中は非常に過ごしやすく快適である。それと同時に，掃除機もかけやすいし，物をどけることもなくスムーズに掃除を行うことが出来る。

では家具の代用を何にするかが問題になる。私は押し入れを箪笥代わりにコートやワンピース，スーツ等を掛けている。また，たたんでもしわになりにくいポロシャツ，Tシャツ等は積み上げ可能な引き出しを活用し，押し入れに積み上げている。下着，靴下類も同様である。

次にやることは，一年以上着ていない服や，殆ど使わない電気製品，台所用品は思いきって処分することである。いつか使うかもしれない。いず

れいるかもしれないという気持ちは捨てることである。ここで重要なことは，家の中にあるものを自分が生きていくうえで本当に必要なものか考えながら，感じながら処分していくことである。処分するときは，今まで自分の生活の一部を支えてくれてきたものであるから，そのことに感謝して処分する。その過程を通して本当に自分に必要なものが見えてくるのである。

自分にとって本当に必要なものが見えてきたら，それ以後は本当に必要な物しか買わないことにする。何故買うかということを自分自身によく問いかけながら買うことである。本当に欲しいものは何なのか。それを買うことによって本当に気持ちが満たされるのか，よく考えながら買うことである。このことを意識し，本当に必要なものが分ったとき，セルフイメージが拡大する。例えば煙草。何故煙草を吸うのか。ストレスだとしたら，ストレスの原因は何か。どうしたらその原因を解決できるか。煙草を吸うことがどれくらい役に立っているかということも考えることである。本当に欲しいものを手に入れたとき，煙草を吸う必要はなくなるかもしれない。

このように，何故それを買うかということを自分自身に，常に真剣に問いかけながら買ったとき，自分が何を目指しているか，本当に欲しいものは何かということが見えてくる。

それは多くの場合，愛と所属の欲求を満たしてくれるものであるか，承認の欲求を満たしてくれるものであるか，自己実現の欲求を満たしてくれるものかのいづれかである。それは，物だけでは満たされることはない。それらを得るためには，自分の殻を破らなければならない。自分の行動パタンに気付き，それを規定している観念を知り，不必要な観念を捨て，新たな自分を発掘し，発見しなければならない。例えば，愛されないと感じているときは，自分の気持ちをうまく伝えられるコミュニケーションの能力を高めたり，人間関係を悪くしている自分の行動パターンに気づき，それを変えていく必要がある。自分自身を認めてもらいたいときは，ブランドで身を飾るより，心を磨き，人には負けない何かの能力を身につけるの

がいいであろう。これは自分に自信をつけるためにも必要である。自己実現したいときは，自分は何に向いているか，自分が一番活かされる場はどんなところか，といったことを真剣に問いかけその答えを見つけ出していく必要がある。

自分の殻を破ったとき，今迄とは違ったものの見方，行動が出来るようになってくる。嫌いだった人も嫌いでなくなったりする。自分の思考，感情，行動を規定していた無意識の中の観念を意識化することによって，意識の深化が進む。自然によって人は活かされているということも分かってくる。すると，心が満たされるためには，物は少なくて済むということが分かってくる。確かなことは，余計なモノを買わずに豊かな心で生きられる人が増えたときに，本当の意味で地球環境問題が解決するということである。

意識の深化と進化を進め，集合無意識や本来の自己を意識できた人が，環境問題を解決するための主体となることが出来る。何故ならば，そうでない人は，環境価値と貨幣価値の選択を迫られたときに，即座に貨幣価値を選んでしまうからである。そして，環境を守るためには，生活の中で環境に優しい生活をすることが必要になるが，法律を作ってそれを一人一人に守らせるとなると，そのためのコストが膨大なものになってしまうからである。環境に優しい生活をどんなに説いたところで，意識のない人には伝わらない。意識のある人が少しずつでも周りの人々に伝え，波紋を広げていくことが大切である。

もし，全ての人々が本来の自己を意識することが出来るならば，資本主義社会の下でも環境問題は解決することが出来る。何故なら，本来の自己で生きるということは，自分が心の底から楽しいと思ってやっていることが，そのまま周りの人にとっても必要なものになるからである。従って，そのようなものであれば売れるから，生活に必要な金は入ってくることになる。喜びが喜びとなって伝わり，結果的に気持ちよく金が入ってくる。

しかしながら，資本主義経済の下で，全ての人々がそのような意識を持

つことは考えにくい。何故なら，資本主義経済が商品経済であり，労働力が商品化されている。そこでは，生活するために最小限必要とするものさえ，貨幣がないと手に入れることが出来ない。その結果，盲目的に貨幣を追い求め本来の自己を意識出来なくなるからである。意識の深化と進化を進めやすい社会経済システムを創っていく必要がある。

そのようなシステムを創る場合にまず考えなくてはならないことは，食料の問題である。人間は誰でも食べないと生きていくことは出来ない。従って，最低限誰でも食べていけるだけのシステムを創らなければならない。貨幣がなくても，働く意志と能力を持っている人は誰でも，働いて食べていけるだげのシステムを創らなければならない。自分自身が失業したり迷ったりしても安心なんだという安堵感があれば，自分を殺して働くことはないし，無理矢理自分をマシン化する必要もない。

その際重要になるのが，農業である。食料を国内で自給することは，安全保障の面ばかりではなく，国民の健康にとって重要なことである。それは，輸入食料は農薬汚染の心配があるという以上に重要なことである。つまり，その地域でとれたものを食べるということが人間にとって最も自然であるし，健康的な食生活のあり方である。そして，誰でも生活に必要なだけの食べ物を十分に食べられる社会を創る必要がある。

そこで農業のあり方が問題になる訳であるが，農業のあり方として，共同生産の方法が重要になると思われる。それは何故かといえば，環境問題を解決するためには，自然との繋がりを人間が回復する必要と，共同体感覚を取り戻す必要があるが，そのための手段として農業は重要な役割を果たすことが出来るからである。

毎日農作物や家畜を相手にすることにより，自然の力によって人間が活かされていることに気付くことが出来る。コンクリートの中で，ストレスを溜め込んでいた生活から，自然の中の生活に戻ると，鈍っていた感受性を取り戻すことも出来る。そして，人と共に農業をやることにより，共同体感覚を取り戻すことが出来る。現代社会の問題は人間関係の悪化として

現れることが多いが，それは，本来の自己を忘れ，命令されるままにただやみくもに働いているからである。自分自身を見つめながら，共に農作業を行い，出来たものを分かち合う。意識深化のための訓練をしながら共同で農業生産を行っていくのである。その中から，人と人との深いコミュニケーションをすることが出来る。いい人間関係，本昔で話し合える人間関係の中からは，ストレスは生じない。心が綺麗であれば，周りの環境も綺麗に保たれる。何故なら，心が綺麗であれば，周りの汚れた環境に耐えられないからである。だから，周りの環境が汚れていても平気な人は，綺麗な心の周りを鎧がまとい，感受性が鈍くなっているのである。心の鎧をはがし，人間本来の生まれ立ての清い原点に立ち返ってみることが重要になってくる。

このように，本来の自己を取り戻すことによって，人間の感覚がかわってくるのであるが，このことをマルクスは，例えば，次のように述べている。[5)]

「社会的人間の諸感覚は，非社会的人間のそれとは別の諸感覚なのである。同様に，人間的本質の対象的に展開された富を通じてはじめて，主体的な人間的感性の富が，音楽的な耳が，形態の美に対する目が，要するに，人間的な享受をする能力のある諸感覚が，すなわち人間的本質諸力として確証される諸感覚が，はじめて完成されたり，はじめて生みだされたりするのである。なぜなら，たんに五感だけではなく，いわゆる精神的諸感覚，実践的諸感覚(意志，愛など)，一言でいえば，人間的感覚，諸感覚の人間性は，感覚の対象の現存によって，人間化された自然によって，はじめて生成するからである。…粗野な実際的な欲求にとらわれている感覚は，また偏狭な感覚しかもっていない。」

5）マルクス，「経済学・哲学草稿」［2］，139-140ページ。

意識深化の訓練を行い，本来の自己との対話を通して，本来の自己の方向性が農業に向いていることが分った人達，つまり，農業が好きで農業をしているときにリラックスできる人達が集まって，農業の共同経営を行うのである。そこはまた，自分を見つめ，自然との繋がりを回復し，共同体感覚や本来の自己を取り戻す訓練の場としても活用される。農作業を共同で行うということは，ごく最近まで日本では行われていた。また，ヤマギシズムという農業の生産共同体は日本で実際に行われていて，かなりの成功を収めている。最近は，海外にも農場を創り，生産を行っている。農業は，自然を相手に自然の中で生産を行うのであるから，意識深化のための少しの訓練さえあれば，割と簡単に共同体感覚を取り戻すことが出来，共同生産をすることが出来る。共同生産をし，できた農作物は共同で分配する。そして，余剰農産物を共同体の外部の人々との交換に出す。

生産力が低く，人々の物的な所有欲も大きければこのようなことは不可能である。しかしながら，今日，生産力が高まり，我々の生活は物に溢れ，心の豊かさが真剣に問われている。この様な時代だから，人と人とのコミュニケーションを重視し，共同で農業をやり，作ったものを分かち合うということは十分出来ると思われる。

農家が食べていけない社会はおかしい。米なら米，みかんならみかんと生産物を特化してしまうから，商品経済の下では，換金出来ないと食べていけないのであろ。従って，幾つかの農家が集り，生活に必要な食料は共同体の内部で自給出来るようにすれば，確実に食べていくことは出来る。そこで必要なのは，ほんの少しの意識深化のための訓練だけである。

このような農業の生産共同体が出来，国内の食料が自給出来るようになると，次の段階に進む。次の段階では，農業の生産共同体に入って農業生産をするか，農業以外の企業で生産するかの選択が自由に出来るようにする。貨本主義社会の不安は，食べていかれないかもしれないという不安から生じる。確実に食べていけるという安心感があれば，もっと心にゆとりのある生活が出来るようになると思われる。

そこで，失業した人は，この農業の生産共同体に入り，意識深化の訓練をしながら共同体感覚と自然との繋がりを取り戻して貰う。そして，本来の自己との対話を通して，自分が心の底から何をしたいと思っているのかをはっきりさせるのである。それがはっきりしない人や，心の底から農業をやりたい人は，そのままそこで農業生産に従事すればいいのである。

農業生産の中から，本来の自己の方向性が農業以外にあることが分った人々は，同じ方向性を持つ人達が集って，小規模の共同経営を行うことになる。大量生産大量消費の時代は終わっている。先進国では多品種少量生産が進んできている。このままいくと，服にしても，自動車にしても，同じものは二つとなく，人それぞれ違った財が消費される可能性がある。本来の自己は一人一人違っている。その一人一人違った個性を完成させるためには，本当に自分にあった物を消費する必要がある。人々の着る服は個性的になり，一人一人違ってくる。一人一人が芸術家と呼べるような生活を始める。この様になると，大規模工場による大量生産では，対応出来なくなる。小規模の共同経営による企業の方が，効率的に生産することが出来る。また，志を同じくする仲間と一緒にいることが，どれほど自分のはげみにもなり，生きることのすばらしさになっていくことか。それに，志を同じくする人が集ると，信じられないくらいの大きな力を発揮することが出来る。

また，本来の自己を意識しながら生産しているときは，自分が満足していると共に，社会に対しても有用なものを生産していることになる。何故なら，本来の自己は集合無意識の奥にあり，個人的意識がそのまま社会的意識になるからである。このことをマルクスは，例えば，次のように述べている。[6)]

「私が科学的等々の活動をする——これは私がめったに他人との直接

6）マルクス，「経済学・哲学草稿」［2］，134ページ。

的共同のもとに遂行できない活動なのであるが———その場合でも，私は人間として活動しているがゆえに，社会的である。私の活動の素材が私に———思想家の活動がそこで行われる言語でさえそうであるように———社会的産物として与えられているばかりでなく，私自身の現存が社会的活動なのである。だから，私が自分からなにかをつくるにしても，それを私は社会のために自分からつくるのであり，しかも社会的存在としての私の意識をもってつくるのである。」(強調点は原著者)

そして，必要なだけ生産されて需要がなくなれば，農業生産に自由に戻ることが出来る。不必要なものを無理矢理作る必要はないのである。

資本主義経済が発展していく途中で，大量の農業人口が工場労働人口に吸収され，工業生産を増加させてきた。しかし今，生産力が発展し，物が溢れている。本来の自己の欲求が見えなくなり，自然との繋がりも無くしてきている。そして多くの人々が，物の豊かさよりも心の豊かさを求めるようになった今日，自然の生命力を高める力を見直し，農業を豊かに生きるための，本来の自己を取り戻すための手段として，社会経済システムの中に組込むことは重要だと考えられる。

この様な場を創ると，現実からの逃避の場となることが恐れられるが，全体から見ればそのような人々は極小数に止まり，問題にはならない。何故なら，人は殆どの人々が一生懸命働いている場に入った場合，一生懸命働くからである。自分らしく活き活きと働いている人を身近に見たとき，人は怠惰に暮すよりも，活き活きと働くことを選ぶものである。

このように，自然との繋がりと，共同体感覚を取り戻し，意識深化の訓練の場としての農業の生産共同体から出発して，最終的に本来の自己の方向性を同じくする人々の生産共同体のネットワーク社会が完成する。そこでは，国内自給が出来るだけの農業生産力があり，生産するものがなくなれば，農業の生産共同体に戻ることが出来るため，食べていけない不安は

ない。農業以外のことを心の底からやりたくなれば，そういう人々が集ってそれをやるし，やりつくして方向性が見えなくなれば，自分を見つめ直すために農業共同体に戻る。従って，本来の自己を取り戻すためのプロセスを常に歩むことが出来るため，自分の調子で居場所を確保することが，何の迷いも気になることもなく出来る。その結果，ストレスや悪感情が溜まらず，常に意識がきれいなため，自然に環境も守られることになる。

生産物は，人々が社会的意識に目覚めて，社会的意識で生産するので，人類の進歩の役にたち，地球環境と調和的な物が生産されることになる。財の交換も，貨幣による交換ではなくて，コンピュータの発達による通信網の整備が進むため，生産共同体間の物々交換が中心になる。生産力がさらに大きくなり，人々のプロセスがさらに進むと，無条件の愛を人々が体感出来るようになり，余剰生産物を生産物の不足しているところにただ単に贈与するようになる。貨幣に縛られず，人間本来がもつ愛が確認できる。交換経済から贈与経済になるのである。

国家の役割としては，道路，通信，上下水道等の社会資本の整備が中心になる。

## V．終わりに

本稿では，環境問題について，潜在意識の視点から論じてきた。環境問題の本質は，人々が集合無意識や本来の自己を意識出来なくなることにより，自然との繋がりを無くしたことにある。人々がその人固有のプロセスを進めなくなると，潜在意識が汚染される。自分自身の心が汚染されることにより，環境の悪化に対して無頓着になる。

このように，自然との繋がりを無くしてしまう社会経済的原因は資本主義社会の貨幣のシンボル作用である。資本主義仕会では，貨幣がないと生活に必要な最低限の物も手に入れることが出来ないため，貨幣が何よりも優先されるようになる。盲目的に貨幣を追い求めるために，本来の自己を

忘れることになる。

環境問題を解決するためには，人々の行動を変えなくてはならないが，その方法として原理的に三つの方法がある。第一の方法は，人間は貨幣シンボルにとらわれていて，これは変えることが出来ないと考える場合である。この場合には，税や補助金，ゴミの有料化等々，環境に関わることを全て貨幣価値化することになる。第二の方法は，貨幣価値よりも環境価値を優先するように，人々の意識を変えていく方法である。そして第三の方法は，人々のプロセスを進めて，集合無意識や本来の自己を意識し，自然との繋がりを取り戻すことである。

自然との繋がりを取り戻すことが根本的な解決であるが，資本主義社会は，経済成長をしないと持続できない経済システムなので，自然との繋がりを取り戻すことは困難である。

そこで，誰でも不安なく食べていくことが出来る経済システムを創りださなければならない。俗に言う食いっぱぐれがないということが，意識の中に植え付けられたとき，人は何物にも縛られなくなり，情緒も奪われることがない。

新しい経済システムとして，生産共同体のネットワーク社会が考えられる。そこで中心的な役割を果たすのは，農業の生産共同体である。農業の生産力を高め，国内で食料は自給出来るようにする。そして，失業した人が，自然との繋がりと，本来の自己を取り戻す場として，この農業の生産共同体を利用するのである。これは老人問題の解決にも大きな役割を果たすことが出来る。本来の自己を取り戻したならば，本来の自己の方向性を等しくする人々が集って，共同経宮をするのである。このような社会経済システムを創ることによって，食べ物の不安がなくなり，経済成長をしなくても持続可能な経済になるので，環境問題は解決していくことが出来る。

21世紀に向けて，人が生きる姿をもう一度問い直し，洗い直す必要があると考える。何が大切なことなのか，自分を守り愛することがどれほど偉大な力をもっているのかということを，人間や自然を深く理解することに

よって知り，現実の社会経済問題を解決するために，活かしていきたいものである。

## [参考文献]

1）経済企画庁国民生活局編，「国民生活を変える新たな主役たち」，経済企画庁国民生活局，1991年
2）マルクス．K.，城塚登・田中吉六訳「経済学・哲学草稿」，岩波文庫，1964年
3）マズロー，A．H.，小口忠彦訳，「改定新版人間性の心理学」，産業能率大学出版部，1987年
4）宮本憲一，「環境経済学」，岩波書店，1989年
5）馬田哲次，『新しい労働の在り方を目指して―プロセスを進める労働』山口経済学雑誌，1993年，第41巻，第 3 ・ 4 号
6）ヤマギシズム生活実顕地本庁文化科編，「人間と自然が一体のヤマギシズム農法」，農山漁村文化協会，1987年
7）ユング，C．G.，高橋義孝訳，「無意識の心理」，人文書院，1977年
8）ユング，C．G.，松代洋一・渡辺学訳「自我と無意識」，思索社，1984年